

想像して、考えて、——戦後80年—— 今、私たちがすべきこと



平和の尊さや戦争を二度と起こしては
いけない、ということは多くの人が理解し
ていることでしょう。でも、今も世界のど
こかで戦争は起こっています。

戦後80年。戦争や当時の暮らしを経験
した人はどんどん減っている今、私たちに
できることはどんなことでしょうか。貴重
な証言と戦争遺品から、戦争とは、平和と
は何か、想像して、考えてください。



空襲に備え、みんなが防空頭巾を肌身離さず持っていた

竹槍



もんぺ姿で竹槍訓練をする



くわを持ち、農業実習を受ける女性たち

語り継がれる記憶①

子どもや孫たちには私が経験した思いは絶対にしてほしくない



竹内 ハマ子さん (88)
=上川中央=

戦争が始まったのは10歳のときでした。終戦が18歳だったので8年もの長い間、戦争の中で暮らしました。中でも鮮明に覚えているのは、内子に爆弾が落とされた日のことです。

あるとき、昼間に空襲警報が鳴り響き、ふと空を見上げるとアメリカの飛行機が飛んできていました。B29を中心にして隊列を組み、「グリーングリーン」と不気味な音を立ててやってきます。家には病気で寝たきりの姉がいました。私は急いで姉を背負い、防空頭巾をかぶり、裏山まで走りました。木の隙間から、飛行機が過ぎ去るのをじっと見ていると、一機が急降下。どうしたのだろうと思った瞬間、「ドーン」とすさまじい爆音が響きました。知清河原に爆弾が落ち、大きな穴が開いたと、後から聞きました。敵国の力と戦争の怖さを思い知った出来事で、どうか早く終わってほしいと願わずにはいられませんでした。

しかし、戦争は大きくなる一方

「千人針」は弾除けのお守りで、出兵する兵隊さんが腹などに巻いて戦っていました。白い布に千人が一針ずつ赤い玉結びを縫い、地域みんなで協力して作っていました。私も小学生だった頃、何本も縫った記憶があります。幼いながらも「無事に帰って来てください」と、一針一針に心を込めました。

戦争が激しくなってきた昭和20年、私は8歳でした。この上川の空にもアメリカの飛行機がひっきりなしに飛んできました。日が陰るくらい数十機が並んで迫ってくるのです。山際まで低空飛行するので、撃たれるのではと、恐ろしくてたまりませんでした。暮らしもどんどん苦しくなり、米は国に供出しなければならず、麦やサツマイモが主食でした。服や下着は着物をほどこいて作り、ぜいたくは一切できませんでした。

一番つらかったのは、終戦する2カ月前に母が病気で亡くなったことです。戦時中の暮らしがたたったのかもしれない。

グラマンに震えながら病院の母へ届けた梅干し
心から笑うことはほとんどありませんでした

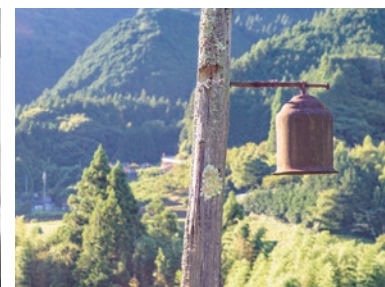
入院しても薬もなく、治療も何もできないままだったのではないかと思います。まだ40歳の若さでした。最後に会えたのは亡くなる3カ月前。「梅干しが食べたい」という母のために、病院まで8キロの道のりをひたすらに歩いて届けた日でした。空襲警報が鳴り、上空を飛ぶグラマンに震えながらも、やっとの思いで病室に着くと、「よう来てくれた」と母が泣きながら抱きしめてくれたのを覚えています。そして、私の髪を優しく櫛でといてくれました。

戦時中はとにかく寂しかったです。大好きな母を失い、家族全員が悲しみに暮れていました。生活するのにみんなが必死で、かまっても言えず、甘えたくても甘えられない。つらく寂しい子ども時代でした。心から笑うことなど、ほとんどなかったと思います。戦争は多くの命と人の幸せを奪います。子どもや孫たちには私が経験した思いは、絶対にしてほしくないです。

ハマ子さんの義兄が持っていた千人針。内子町が所蔵



アメリカのグラマン戦闘機



空襲を知らせる半鐘。今も上川地区に残る

Grumman F6F-5N "Hellcat" night fighters 80-G-468301
Naval History and Heritage Command, Washington, DC



清水 ひとるさん (98)
=上立山=

語り継がれる記憶②

家族や周りの人達に感謝し、残りの人生を穏やかに生きたい

でした。小学校では空襲警報がたびたび鳴り、落ち着いて勉強することもできません。高学年になると勤労奉仕が始まり、出征した兵隊さんの家を訪ねては、麦刈りや炭焼きなどの手伝いをしました。女学校を卒業するころにはアメリカ兵の上陸に備え「ヤー、ヤー」と叫びながら竹槍の訓練を受けていました。こんなもので勝てるはずがないのに、当時は「国を守らなければ」と一生懸命でした。

終戦の日にはラジオの前で、天皇陛下のお言葉に耳を澄ませました。長く続いた戦争がやっと終わったという安堵と、負けた悲しみが入り混じり、張り詰めていた糸がぽつんと切れたような気持ちでした。

私の青春時代は暗い戦争の記憶ばかりです。あれから80年、こんなにも豊かな時代が来るなんて、当時の私には想像もできませんでした。大事にしてくれる家族や周りの人たちに感謝し、残りの人生を穏やかに生きていきたいです。



空襲直後の松山。建物が焼失し焼け野原に
写真:愛媛県歴史文化博物館所蔵(故山内一郎氏撮影)

18歳のとき松山空襲を体験しました。昭和20年7月26日、愛媛青年師範学校に通っていた私は、寮で就寝していました。

深夜1時ごろ突然の空襲警報で目が覚め、逃げる準備をしていたら「ザーツ」とものすごい音で焼夷弾が降ってきました。

語り継がれる記憶④
深夜1時の空襲警報
今も目に焼き付く
火の海の市街地



ました。学校が燃えては大変と無我夢中で焼夷弾を3つほど消したのを覚えています。その後、慌てて近くの防空壕へ友人と逃げ込みました。震えながら戦闘機が去るのを待ち、外に出てみると、松山の市街地は火の海に……。一夜にして焼け野原と化し、いくつもの命が奪われました。幸い学校も寮も焼けずに残り、友人や先生たちは無事でしたが、あの恐ろしい光景は今も目に焼き付いています。

戦争の記憶や光景は忘れることはできません。世界では今も戦争が起こっている国があります。過去にあれほどの痛ましい経験をしたのに、なぜなくならないのか。戦争は尊い命の奪い合い。もう二度と起こらないことを切に願います。

語り継がれる記憶③
子どもさえ命を
かけた時代のことを
どうか忘れないで



「国のために戦おう」と14歳で海軍に志願しました。鹿児島県の鹿屋海軍航空基地に配属され、上官からの命令を各部署へ伝える役割をしていました。基地は沖縄に近く、米軍機が毎日のように襲来します。「バリバリバリツ」と撃ち込まれた機銃掃射に、多くの戦友が犠牲となりました。私も機関銃の弾が体のすぐ横をかすめ、命からがら防空壕に飛び込んだこともありま

鹿屋には特攻隊が出撃する飛行場がありました。多くの若い兵士たちが片道分の燃料だけを戦闘機に積み、爆弾とともに飛び立って行く姿を何度も見送りました。特攻隊員の気持ちを考えると、万感の思いがこみ上げてきて、手を合わせずにはいられませんでした。

当時を振り返って思うのは「教育の恐ろしさ」です。あの頃の私は「国のために死ぬことが名誉」だと信じて疑わず、恐怖すら感じていませんでした。仲間が撃たれたときも「治ってほ

「国のために死ぬことが名誉」と信じ
振り返って思うのは「教育の恐ろしさ」

しい」とは思っても、「戦争はいけない」「惨めなことだ」という気持ちには、はなからありませんでした。とても悲しいことです。私たちが朝夕に口ずさんでいた軍歌には、「死んで帰れ」という歌詞があり、それを励ました。今では信じられないことですが、それが当たり前の時代だったのです。

終戦後、立川の土を踏みしめたときは、思わず涙があふれました。母は生きて帰った私を見て、地面に座り込んで泣き崩れていました。14歳の子どもを戦地に送り出した親の気持ちを想像すると、胸が痛みます。

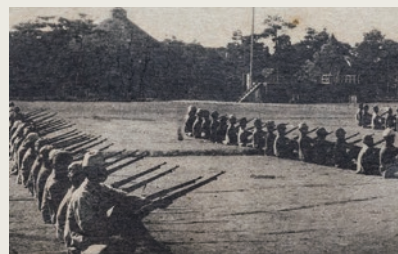
人は決して一人では生きていきません。これからの世の中をつくる若い人たちには、人とのつながりを大切にし、平和の尊さを心に刻んで生きてほしいです。子どもでさえ国のために命をかけた時代があったことを、どうか忘れないでください。二度とあのような時代をつくってはいけません。

語り継がれる記憶⑤
義勇軍に入り満州へ
何度も死を覚悟した

私は14歳のころに義勇軍に入り、満州に渡りました。ここではソ連軍の戦車に体当たりするための爆弾を製作。日本兵が爆弾を背負って玉碎する戦法で、私たちもいずれは同じ運命になると、子どもながらに覚悟をしていました。

8月15日、日本の敗戦を知らせる玉音放送を聞いたときは涙がにじみました。自分の命もこれで終わり……。自爆しなければと、爆弾を背負って準備をしていましたが、ソ連との交渉で命をつなぎ留めることができたのです。

終戦後は中国人の農家に、労働者として雇われる毎日が続きました。暗いうちから起こされ、日が落ちるまで農作業に使われる日々。どんなに働いても、タンポポの根にみそを塗っただけの質素な食



満州に渡る前、茨城県でした鉄砲訓練

久保 常義さん (95) =立川中央=

事だったこともあり。歩けないほど疲れ果て、死の一步手前だと感じたこともあり。今日を生きるのに精いっぱい、ふるさと思いう暇はありませんでした。

ようやく立川に戻れたのは16歳の夏。満州では何度も死を覚悟し、振り返ればよう生きとったもんじやと思います。戦争を体験したからこそ、平和のありがたさを身染みて感じます。



防空壕の中にあった通信室



鹿屋基地から出撃する特攻隊



旧内子駅で出兵兵士の見送り



自治・学習課 学芸員
太尾 友香さん(24)

子ども達と一緒に考えた 戦争の記憶を受け継ぐこと——

地元の戦争体験に学ぶ 内子小学校の平和学習

内子小学校では毎年、6年生が平和学習を行っています。これまでは地域の人が講師を務めていましたが、今年は学芸員の私も講師で呼んでもらい、内子町の戦時中の暮らしを子ども達に紹介しました。講演では「戦時中は食糧難で運動場を畑にしていた」「芋あめがおやつだった」など、これまでに地域の人たちから集めた戦争の体験談を話しました。

千人針や竹槍といった実物にも触れてもらい、当時は誰が、どんな思いで使っていたのかを想像してもらいました。子どもたちからは「家族に戦争の話聞いてみたい」「戦争は二度としたくない」「平和のありがたさが分かった」などの感想が寄せられ、とてもうれしく思いました。戦時中と現代を比べることで、

平和が当たり前ではないと気づき、「戦争とは何か」を考えるきっかけにもなったと思います。

物や話を通して 戦争の記憶を受け継ぐ

現在、内子町では戦後80年の節目として、町内各地で巡回展を開催中です。私も展示を準備するにあたって、地域の人たちから戦争体験を伺い、教科書にはないリアルな声に触れることができました。戦争を知らない私たちのような若い世代が戦争の記憶を受け継ぎ、バトンをつないでいくことが大切だと感じました。皆さんもこの機会に展示に足を運んでもらい、当時の写真や道具を見て、戦争の記憶に触れてみてください。そして、家族や地域の身近な人と一緒に、戦争について話してみてください。



内子小学校6年生の平和授業の様子

まちの戦争の記憶に触れて、感じて——

戦後80年夏季巡回展「内子と戦争」

戦時中の内子町での暮らしを当時の写真や資料、体験談を通して紹介しています。各自治センターを巡回し、展示をしています。

●場所／期間

- ▷五十崎自治センター 7月31日(木)～8月13日(水)
- ▷内子自治センター 8月15日(金)～8月27日(水)
- ▷内子東自治センター 8月29日(金)～9月12日(金)

●時間 午前9時～午後5時(平日のみ)

【問い合わせ】

自治・学習課 生涯学習係
☎0893(44)2114

巡回展の詳細は
こちらから▶



展示を見たり、冊子を読んだりして、
考えてみませんか。戦争のこと、平和の尊さ——

『私の戦争体験記』と紙芝居DVD

町内の皆さんの貴重な戦争体験をまとめた一冊。戦争の記憶を次の世代へ伝えようと、平和への祈りを込めて作られました。(1冊1,000円で販売)

【問い合わせ】

保健福祉課 高齢者福祉係
☎0893(44)6154



◀紙芝居DVDはこちら
から見られます

広報うちこ 2015. 8月号特集

戦後70年 語り継ぐこと

戦後70年を特集した号です。今月号と併せてぜひ読んでみてください。



昇さんに贈られた勲章



富雄さんの叔父、本田昇さん
満州で撮影した一枚



戦場へ向かう昇さんを
激励する「寄せ書き国旗」

言葉に耳を傾け、
記憶にふれ、
思いを巡らせる
それが未来の平和に

祖母と母から、 戦争を語り継ぐ

私の叔父・昇のぼるは31歳のころ、昭和20年5月に沖縄県で戦死しました。本田家には今でも写真や勲章、寄せ書き国旗などの叔父の遺品が大事に保管されています。祖母や母にとっては、遺品を見るのはつらかったかもしれません。でも叔父が生きた証として残しておきたかったのだと思います。私は戦後生まれで戦争を体験してはいませんが、もの心ついたところから遺品を見せてもらったり、叔父の話聞かされたりしていたので、戦争がどれほど悲惨で、多くの命や人生を奪うものであったか、想像するようになりました。

戦争の記憶を なくさないために

戦争が終わって80年が経ち、当時を知る人の声を直接聞ける機会は少なくなっています。語り継ぐ人が減ってしまえば、戦争の記憶はいずれ失われてしまいます。今の平和な暮らしを当たり前のように感じている人も多いかもしれませんが、この先もずっと続くと保証されたものではありません。だからこそ戦争の恐ろしさや平和の尊さを次の世代へ伝えていくことが大切だと思います。戦争を体験した人の言葉に耳を傾け、その記憶に触れることが、それが未来の平和につながる一歩になるのではないのでしょうか。

戦没者を悼み 思いを巡らせて——

内子町遺族会では町内にある二つの慰霊塔の手入れや、平和の大切さを語り継ぐ活動をしています。龍王城跡にある慰霊塔は、毎年8月13～15の3日間は開放されていて、一般の人も塔内に入るができます。塔内には720人の兵士の遺影が並んでいます。国のために命を捧げた若者の思い、彼らを見送った家族の悲しみに思いを寄せると、いたたまれません。この場所を訪れて戦争のつらさや平和の尊さについて思いを巡らせてみてください。一人でも多くの人が平和について考えるきっかけになることを願っています。



内子町遺族会 会長
本田 富雄さん(78) = 立石 =



2年に一度開かれる、内子町戦没者慰霊祭



龍王城跡にある慰霊塔の中に並ぶ兵士の遺影



龍王城跡にある慰霊塔 小田地域にある慰霊塔